



電飾

イギリスの演劇業界には、「電飾さん/電飾技師」という人/機関がほとんど存在しない気がします。West Endミュージカルなどの、お金をかけた大規模な舞台ですと、LEDやネオンライトを取り扱う会社に、直接カスタム発注をすることがありますが、それ以外のいわゆる一般の演劇小屋では、自分たちで作ることがほとんどです。劇場のテクニシャン、またはカジュアルフリーランサーが、LED、電球や部品をネットで買い集め、劇場内のワークショップで作ることが多いです。よほど複雑な電飾でない限り、特に演劇やダンスなどの作品を自らプロデュースする劇場は、基本的に自力で作ります。そういう細かいものを作るのが上手な人は、他の劇場へ狩り出されたりもします。

LEDテープライトをはじめ、小道具や、大道具に入れるバッテリー式のLEDユニットを作ったり、衣装や小道具の場合だと、ワイヤレスにする必要があるので、ソフトウェアプログラミングに強いオタクの知り合いに頼んで、小型DMXレシーバーを作ってもらったり、Codingができる知り合いに、ネットワークを組んでもらったりすることもあります。ネットワーク関係は電飾の枠からはみ出しているの気がしますが、

テレビやショーディスプレイ関係のお

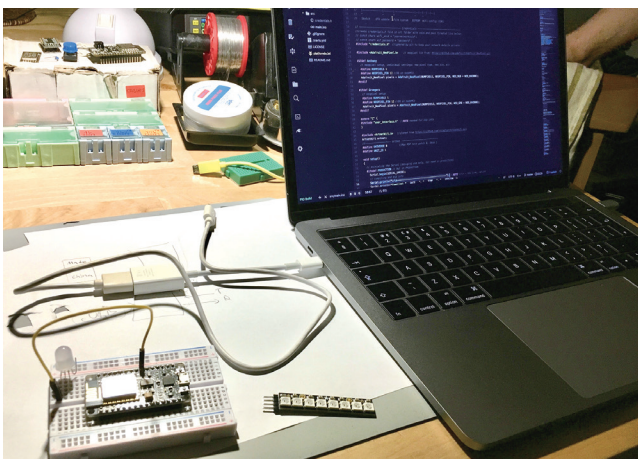
仕事だと、おそらく「電飾技師」という人がたくさん存在すると思います。

一般照明と電飾の中間のような存在の技術者や会社も存在します。イベント関係のお仕事で、よく一緒になるLight Initiativeという会社は、ムービングだけではなく、主にピクセルマッピングができるLEDストリップライトや、ネオンに見せかけたLEDライトを専門に扱う会社です。彼らは、そのような機材をレンタルしたり、量が多い場合は、それ専門の技術者を現場に送り、彼らがプログラミングをします。彼らは日本の電飾さんのように細かい装置やセットにあったサイズのものを作ってくれるわけではないので、電飾というより、イベントイルミネーターとも呼ぶべきでしょうか。

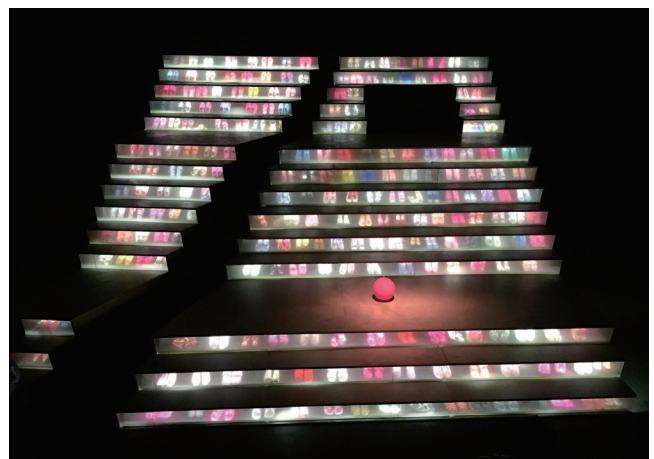
日本から来る劇団のお手伝いをさせていただくときは、彼らが持ち込む電飾のクオリティーにいつも感心させられます。電飾という機関が、日本演劇界で確立しているのはなぜでしょう。「常に人手が全然足りない！」という声を、日本の照明さんによく聞きます。その限られた人数で、仕込みも公演もすべて短い時間内に仕上げなければいけない=現場で電飾のワイヤリングをしている時間などない、という見方もできます。それか、そもそも根本的に仕事の種類が違うということだからでしょうか。照明はデザインの実践で、電飾はデザインを元にした機材開発と

いう違いから、ここまでくっきり仕事に分かれているのかもしれませんが。

先ほど触れた、ソフトウェアプログラミングに強いオタクの話になりますが、私の周りにも何人かいます。彼らは、照明チーフや、音響テクニシャン、プロダクションマネージャーなど、テクニカルに強い人たちです。彼らは、プロダクションごとに新たな挑戦を見つけるとは、喜んでその課題に取り組みます。来月、私が照明デザインする予定の演劇公演で、使いたいものについて、その内の一人にある相談をしました。「風船の中にLEDチップを入れ、ヘリウムを入れて舞台上に浮かせたいので、ワイヤレスでオンオフできる装置を提案してもらえませんか」と。マイクロDMXレシーバー（正確にはDMXの信号を他の信号に置き換えて、マイクロWi-Fiレシーバーでキャッチするシステム）を提案してもらいました。ソフトウェアのCodingも見せてもらいましたが、自分のCoding知識がなさすぎて、ぐーんっと唸ることしかできませんでした。一番のキーポイントは、風船が重さにどこまで耐えられるかです。これは、まだ提案初期段階ですが、とりあえず勧められた機材や部品を揃え始めました。さあ、これを作るのは誰でしょうか？みんな忙しいから…私？！自信ないです！日本の電飾さん、または照明機材開発会社に是非お願いしたいところです。



音響照明ギークの友人のスタジオで、CodingとLEDチップのワイヤレス制御実験



電飾を使った公演「Cuttin It」。今年も違うセットで再ツアー！